

平成 25 年度「教職課程担当教員養成プログラム」

教育・研究活動報告

森下 真実
(広島大学)

広島大学大学院教育学研究科教育人間科学専攻（博士課程後期）は、平成 19 年 9 月から平成 22 年 3 月にかけて、「Ed.D 型大学院プログラムの開発と実践～教職課程担当教員の組織的養成～」(平成 19 年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム)に取り組んだ。同プログラムでは、①確かな研究力に加え、大学教育において実践的な指導力を発揮できる人材、②高等教育を含む教育臨床に的確に対応できる人材、の育成が目指された。同プログラムは、将来、教職課程を担当する大学教員、すなわち「先生の先生」を組織的に養成しようとするものであり、これまで研究者養成に特化してきた大学院教育の在り方を見直すものでもあった。

平成 22 年 3 月に同プログラムが終了した後、これまでの 3 年間にわたる活動を更に発展させる形で引き継いだのが「教職課程担当教員養成プログラム」（以下、「教職 P」と略記）である。新たな名称とともに開始された「教職 P」は、現在 4 年目を迎えている。平成 25 年度「教職 P」の受講者は 11 名（博士課程後期院生）である。博士課程後期 1 年次生は、前後学期を通じて、2 つの授業（「教員養成学講究」と「大学教授学講究」）を履修し、教員養成制度の歴史や大学での教授法を学んだ。博士課程後期 2 年次生は、学内（広島大学）で前学期・後学期各 1 回、計 2 回の教壇実習に取り組み、博士課程後期 3 年次生は、学外（他大学）において教壇実習に取り組んだ。学内外における教壇実習の概要は、次表の通りである。

表 平成 25 年度 学内外における教壇実習

実施時期	実施先	実施科目	実習生 (学年)
5 月 8 日 (水)	広島大学	道德教育指導法	山口 裕毅 (D3)
6 月 7 日 (金)	広島大学	幼児教育学	境 愛一郎 (D2)
7 月 4 日 (木)	高松短期大学	教育制度論	黒木 貴人 (D3)
7 月 18 日 (木)	広島大学	道德教育指導法	中居 舞子 (D2)
11 月 25 日 (月)	関西学院大学	特別活動論	尾場 友和 (D3)
12 月 16 日 (月)	広島大学	教育と社会・制度	境 愛一郎 (D2)
1 月 22 日 (水)	広島大学	教育哲学	中居 舞子 (D2)

教壇実習は、履修生 1 名に対して、教員が 3～4 名（指導教員 1 名、教育指導を担当する TA 指導教員 2～3 名）で指導にあたる。教壇実習の前後には、実習生が作成した指導案および授業の構想について議論をする事前検討会と、実習生が実施した授業について議論をする事後検討会が開かれる。指導案や授業をもとに議論をする中で、専門が異なる教員や履修生の授業についての考え方や授業の見方に触れることで、多角的な授業改善が促進される場として設定されている。事前検討会、事後検討会の後、履修生は授業の再構成、リフレクションを行なう。

博士課程後期 3 年次生は、教職 P の総仕上げとして、「教職教育ポートフォリオ」を作成した。3 年間のプログラムを履修する中で、自分が何を学んだのかを振り返り、自分自身の「授業哲学」をまとめた。彼らには「修了証明書」が手渡され、第四期生として 2 名の修了生が誕生した。

このような、3 年間をかけた組織的で手厚い、重装備な取り組みが、教職 P の最大の特徴である。

上記のプログラムと並行して、教職 P では、平成 23 年度より、履修生を中心とした共同研究をすすめてきている。平成 23 年度は、中国四国教育学会第 63 回大会（於 広島大学大学院教育学研究科）においてラウンドテーブル「これからの大学教員養成の話をしよう」を企画し、平成 24 年度は、第 19 回大学教育研究フォーラム（於 京都大学）において参加者企画セッション「博士課程後期学生がすすめる〈FD〉」を企画した。平成 25 年度は、これまでの共同研究の成果や課題を踏まえて、第 20 回大学教育研究フォーラム（於 京都大学）において共同研究発表を行なった。本報告書に収められている論文は、その成果の一部である。ご一読いただければ幸いである。

こうした共同研究を行なうことを通して、研究室を越えて履修生同士が切磋琢磨できる学びの土壌をつくっていることが、教職 P のもう一つの特徴である。履修生達は、博士論文の計画・執筆の傍ら、自分達で研究テーマを模索し、議論を重ねてきた。履修生にとっては共同研究の難しさやおもしろさを実践しながら学ぶ機会となっているだけでなく、教職 P 実践の改善を担う主体としての姿勢や構えを培う場となっている。

これまで述べてきたような教職 P の実践は、様々な方の支援があってこそ行なえるものである。末筆ながら、運営に携わって下さった教職員ならびに履修生である院生、学外プラクティカムを受け入れていただいた高松大学の松原勝敏先生、関西学院大学の南本長穂先生、共同研究をすすめるにあたりご協力いただいた OB の先生方、そのほか多くの方々に心より感謝申し上げたい。教職 P は、「教職課程担当教員養成」に特化したプログラムである。しかし、教職 P がめざしている方向性や、プログラムに対する履修生の主体的なかかわり方等は、他の大学院教育に対して一つの示唆を与えうるものであろう。こうした教職 P の実践が継続・発展していくことを祈念する。